延宝5年版本『うつほ物語』30冊

『うつほ物語』は、現存する物語の中では、日本最古の長編物語。本学蔵本の函架番号はE－6。延宝5年刊。縦27.1cm×横19cm。袋綴。楮紙。全30冊。外題「うつほ物語 としかけ上 一」。紺色紙表紙。第1冊のみ、題簽右に朱筆直書で「浜臣校本／夏蔭校本／真頼校本」左に朱筆直書で「細井貞雄校本」とある。各冊見返し左下に「黒川真道蔵書」の朱陽印。各冊1丁表右に、上から「ノートルダム清心女子大学図書之印」「黒川真前蔵書」「黒川真頼蔵書」「黒川真頼」の朱陽印。

『うつほ物語』全冊の諸本は、前田家本系、木曽本系、浜田本系、流布本系の四系統に分けられているが、このうち、延宝5年版本は流布本系に含まれる。流布本系は脱落・補写を繰り返しているようであり、錯簡もある。その上、「俊蔭」巻などは明らかに前田家本系であり、他にも前田家本系の巻が混じるようである。

近世になり、版本という形で書物の大量生産が開始された。人や物の流通も格段に飛躍し、限定された層から知が解放された時代でもある。そのためか、近世の国学者は、さまざまな作品の版本に異文を記して校本を作成している。『うつほ物語』は、どの系統の本文も意味不通の箇所が多く見られるが、特に延宝5年版本は読みにくいこともあり、近世の国学者によって多くの校本が作成された。

本学蔵版本もそのような校本の一つで、筆の色や記号を変え、9本もの異同が書き込まれている。これらの名称のうち、たとえば、「浅草文庫」は、2種類あるが、ここでの浅草文庫は明治になって、幕府の蔵書を引き継いだ文庫。現在は、国立公文書館内閣文庫にそのほとんどが保存されている。また、表紙に「細井貞雄校本」「浜臣校本／夏蔭校本／真頼校本」とある。これらのことから、9本のうち、「浅草文庫」を含む、筆の変わる左の5本は、黒川真頼が明治以降に書き込んだものであろうと知られる。さらにその前段階の校本に、九大本で名高い細井貞雄や、清水浜臣、前田夏蔭が関わっているようである。このように、校本の異同や九本の由来を探ることで、さらに近世の知の流通が明らかになろう。

（文学部日本語日本文学科　准教授　新美哲彦）